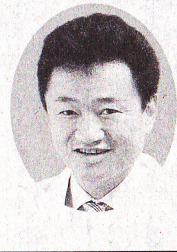


健康

前立腺のロボット手術とは

質問 検診で前立腺特異抗原(PSA)の値が高かったため、精密検査を受けたところ前立腺がんがと診断されました。最近の前立腺がんはロボットを使って治療すると聞きましたが、具体的にはどのように治療するのでしょうか。



井崎 博文
県立中央病院
泌尿器科科医長

回答 前立腺は男性尿道の一部を形成することで排尿に関わり、精液の一部を産生、分泌します。前立腺がんの罹患率は食事の欧米化と高齢化により増加しており、現在は胃、大腸、肺について第4位、2020年には第1位になると推定されています。幸い、PSAによる診断法の進歩により前立腺がんの約90%の方は完治の可能性が高い早期がんで見つかります。

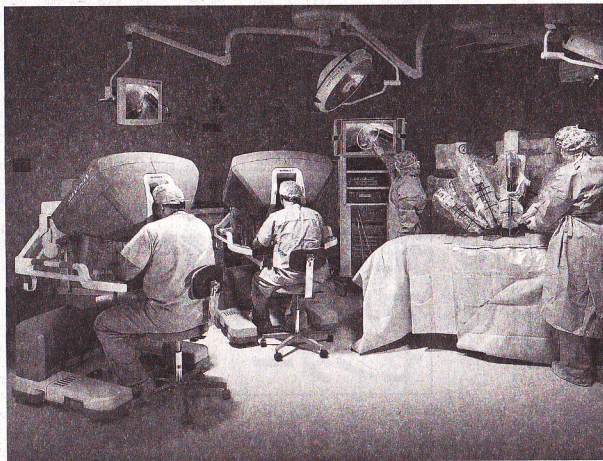
ご質問のロボット手術は、1997年にベルギーでロボットを使用した最初の手術である胆嚢摘出術が行われ、2000年に米国でロボット支援前立腺全摘除術(RARP)が行われました。今

従来より安全で正確に



手術では、前立腺が骨盤の奥の臓器であるため難しい術式の一つでした。また前立腺の周囲には太い静脈が走っているため出血量の多さも問題となっており、さらに術後の尿失禁や勃起不全(ED)の発生も大きな課題でした。

や米での前立腺全摘術の90%がロボット支援で実施され、ロボットのない病院に患者は行かないとまでいわれています。従来の開腹前立腺がん



県立中央病院が導入している最新型の手術支援ロボット「ダビンチSi」

確に、より合併症の少ない手術を行うことができます。出血量は開腹手術の10〜100分の1となり、3D拡大画像で勃起神経をより精密に温存することで、勃起不全予防ができます。また同様に尿道膀胱吻合も、大きな可動域のあるロボット鉗子で正確に吻合でき、尿失禁の低減につながっています。

県立中央病院では、最新型のロボット「ダビンチSi」を導入しています。旧型ロボット(ダビンチS)と比較して、Siは3次元ハイビジョン画像の改善、コントロール(運転席)の操作性向上、左右の鉗子と脚(電気メス)操作の連動による安全機能の向上が図られており、二つのコントロールによる手術やスキルシミュレーター(技能模倣体験機)搭載を可能とすることにより、手術教育面でも進化を遂げています。(第4土曜掲載)

◇ がんに関する質問は徳島がん対策センター(電話088(633)9438)〈平日午前8時半から午後5時まで〉にお寄せください。http://www.toku-gantaiksa.ku.jp/でも受け付けます。

出血や合併症も少なく